

関弘子 七回忌追悼公演

折口信夫の最高傑作「死者の書」

その舞台化を夢に見つつも叶わなかった関弘子の思いを
ゆかりの鏡仙会の能舞台で、音楽詩劇として上演

折口信夫の、関弘子の、今に生きる私たちの
おもかげ人は何処に

折口信夫原作

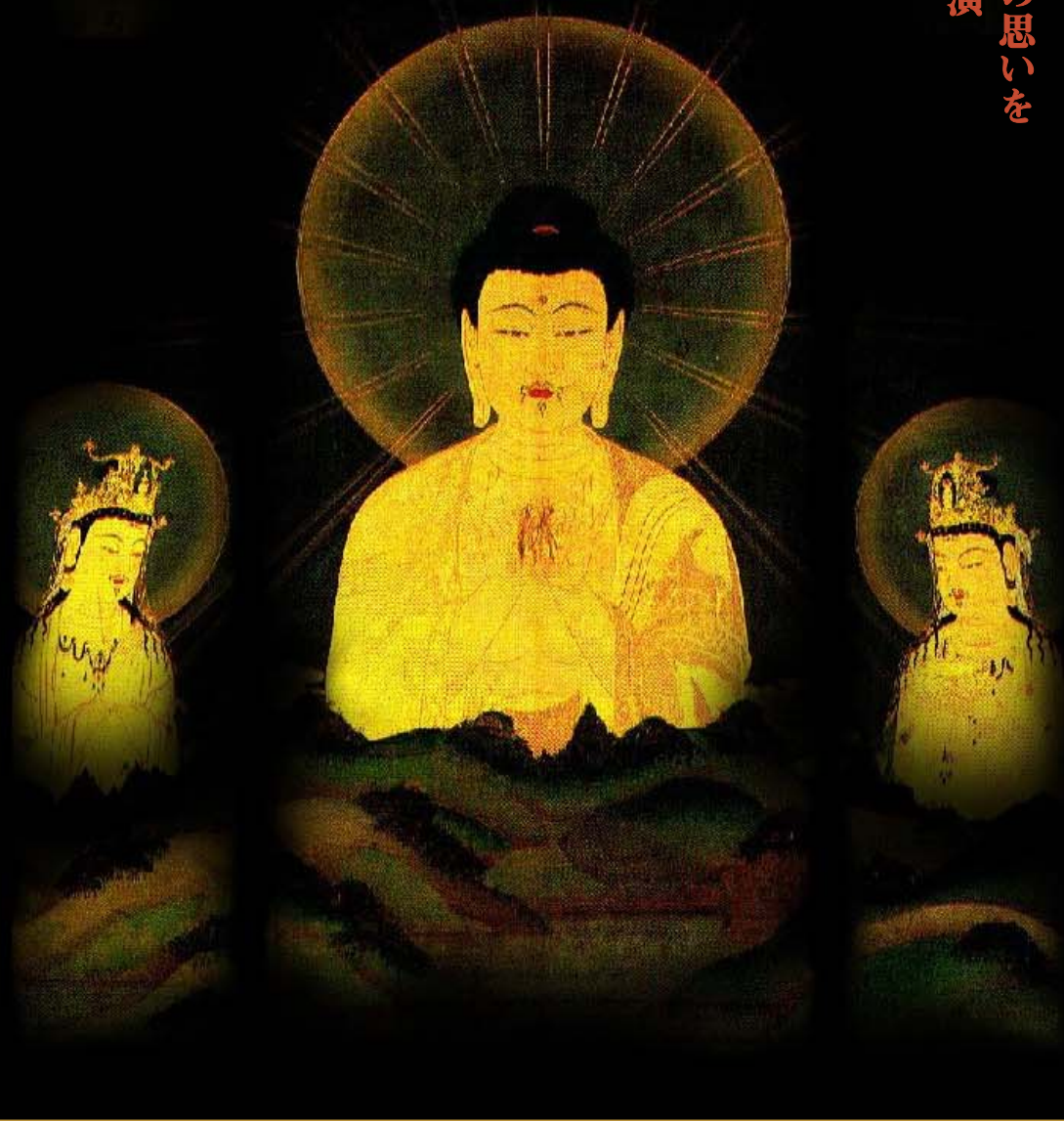
『死者の書』

彼の人の眠りは、徐々に覚めて行った

まっ黒い夜の中に、更に冷え庄するものの

澱んでいるなかに、目のあいて来るのを、覚えたのである

した した した



2014年5月11日(日)

2時半開場 / 3時開演

会場 鏡仙会能楽研究所

『死者の書』より

お聞きおよびかえ 当麻の寺の蓮糸曼荼羅
それを織られた中将姫

お聞きおよびかえ 命を絶たれるその刹那
ひとめ相見た藤原乙女
大津皇子のその執着が 時を超えた

◎ あらすじ

奈良の時代、ある彼岸中日のこと。仏説阿弥陀經の千部手写の念願を果たした藤原南家の姫・郎女が神隠しにあった。二上山の男岳と女岳の間に落ちる日輪の中に、阿弥陀仏の尊き姿を目にし、魂が引き寄せられたのだ。

こう こう … 姫の魂を呼び戻さんとする魂呼びの声。その声が、謀反の罪を着せられて殺され、二上山に葬られた天武天皇の息子・大津皇子の魂を呼び起こしてしまう。

一方、姫は山の麓の当麻寺・女人禁制の万宝蔵院で見咎められ、その罪のあがないのために庵で日々を過ごすことになった。古語を伝える語り部の一族が姫に物語る。

「大津皇子さまが死の刹那、ひと目見た美しき乙女・耳面刀自。その執心が時を経た今も残り、耳面刀自の血筋である郎女様に向けられて、塚があるこの山に呼び寄せられたのだ」と。姫の夢に、佛人が現れた。憂いをもった目、あらわな白い肌。

季節はめぐり、秋分の日。入り日に、尊者の姿…なも、阿弥陀ほとけ―。

阿弥陀仏と佛人の幻が溶け合った。

おいとおしい お寒かろうに。その身を覆ってあげたい。郎女は寝る間も惜しんで蓮糸で機を織り上げると、見守る人びとの目にはそのまま数千の菩薩の浮き出た曼荼羅の姿となった。

構成・演出 笠井 賢一 音楽 橘 政愛
吹きもの 設楽 瞬山

丹下 一 坪井 美香 戸室加寿子 渡部 美保 衣裳 細田ひな子

声の出演 観世鏡之丞

◎ 2014年5月11日(日) 2時半開場 / 3時開演

◎ 入場料：前売 4000円
当日 4500円

◎ 会場：鑛仙会能楽研修所

◎ 地下鉄 表参道駅下車
(銀座線・千代田線・半蔵門線)
A4出口より徒歩3分
〒107・0062
東京都港区南青山4・21・29
TEL03・3401・2285
※駐車場はございません。

◎ 企画制作：すずしろ / アトリエ花習

◎ 協 力：鑛仙会能楽研修所
下北沢アレイホール

◎ お申し込み・お問い合わせ：

すずしろ 090-7847-2670

FAX 0280-75-11090

Eメール suzushiro2010@gmail.com
アトリエ花習 090-9676-3798

